

治、小倉右一郎、藤井浩祐、白井雨山

建築部 中条精一郎、塚本靖、大沢三之助、佐藤功一、武田五

一、岡田信一郎・田辺諄吉

裝飾美術部 板谷波山、津田信夫、和田英作、香取秀真、合田

清、結城素明、海野美盛、沼田一雅、河辺正夫、六角紫水、菅

原直之助、杉浦非水、小川三知、島田佳矣、保坂光山

(傍線は理事)

当日、文展裝飾美術部新設建議を行なうことに決定した。当時の会員は日本画部三十三名、西洋画部二十四名、彫塑部三十一名、建築部十八名、裝飾美術部二十九名で、洋画家たちが率先して作った会だけに西洋画部の会員が圧倒的に多かった。なお、洋画家の中で太平洋画会の中村不折と吉田博は会頭無用説を唱えて破れ、退会した。

以後、同会はロダン展計画(岩村透がパリでロダンと交渉したが成功しなかった)、国民美術協会西部第一回展および講演会(大正二年十月大阪天王寺公園)、会員への揮毫斡旋等の事業に着手した。大正三年、学芸部が置かれ、

久米桂一郎、伊東忠太、○岩村透、○石井柏亭、関野貞、○坂井義三郎、○森田亀之助、塚本靖、○森鷗外、香取秀真、岡田信一郎、小山正太郎(○印は評議員、傍線は理事)

がこれに所属し、また、各部署理事補欠選挙が行われて結城素明(日本画部)、永地秀太(西洋画部)、朝倉文夫(彫塑部)、大沢三之助(建築部)、河辺正夫(裝飾美術部)が当選した。大正五年に至り、同会は後述のように東京美術学校改革運動の狼煙を上げ、美術界に一大旋風

を巻き起こす。

⑧ 学生生活

○西洋画科在学の頃 故谷口午二氏

〔昭和五十八年六月三日、谷口午二氏(大正七年西洋画科卒)をお宅に尋ねて本校在学中の頃のお話を伺った。本稿はそのときの録音をまとめたものである。なお、昭和五十四年『南日本新聞』連載「午二むかし語り」にも学生時代の逸話が少々収録されているので併せて参照されたい。〕

入学

私は中学の頃から絵が好きで、描いていました。美校を三年で中退した山下という絵が上手な方がいて、先輩の紹介でこの人のところで初歩の勉強をしたのです。外の連中は本郷とか川端とかいった東京の研究所へ行っていました。入るとまず予備科が三ヶ月あるわけですが、予備科に入るときは実技の試験はありませんでした。私を入れて三人が特別に予備科に入ったのです。三ヶ月間、長原先生の指導で木炭デッサンを勉強してからもう一回試験(ヴィーナス、アグリッパなどの石膏デッサン)があるのです。私は幸い受かったからそのまま学校に残りましたが、あとの二人はもうそこでほっぽり出されてしまいました。その二人というのが、絵も描けないし、まあ、どうしてこんなのを採ったのだらうと思っていましたら、どうも中学の成績で採っていたらしい。私も成績はそう良い方じゃなかったけれど、どういいうわけか三人のうちに入っていたのです。

西洋画科

西洋画科の本科では一年のときが小林万吾先生、二年が和田英作先生、三年が藤島武二先生、四年が黒田清輝先生でした。それから卒業期(「二学期間」というのがあって、予備科と合せて合計五年になるわけですが、卒業期は卒業制作の期間で、その間に奈良へ勉強しに行く古美研がありました。古美研は新納忠之介先生が案内役で和田英作先生が引率でした。昼間はいろいろ実物を見て夜は講義を聴くわけです。講義というより自分でまとめる時間でしたが、その夜の講義というのが眠くて困りました。でも、それは非常にためになりました。ひと月くらい居たのかも知れませんが「正規の期間は二週間」。新納先生というのがとても詳しい方で、お寺に行つて失礼します、とあがつて、ここを引き出したりあるそこを引き出したりして説明される。それは和尚さんも知らないようなことで、その寺の和尚さんもくつついてきて先生の話を聞いているといった具合でした。

教室に黒田先生がいらつしやるときは、各先生を後ろに従えていて威厳がありました。デッサンなどに手を入れて貰いましたが、「デッサンというのは金釘でも描けるものだ」と言われたのを覚えていいます。線をぼかしたからって柔くなるわけじゃないと、そういう意味だと思えます。一年のときは専ら石膏デッサン、二年から人体デッサン、三年からは油絵をやりました。ほかに、教員免状をとるために洋画の生徒には日本画を、日本画の生徒には洋画をやらせる制度があり、私は岡田秋嶺先生に日本画を習いました。私などは免状を貰つておかないと困ると思つてとつたのです。当時、美校は専門学校でしたが、専門学校出の人の初任給は六十五円、大学出

は八十円でした。

三年のとき一緒だった恩地孝四郎君が、週末のコンクルールのとき和田先生にたてついたことがあります。彼は順番が私の前だったんですが、その絵というのが、リズムカルなクリクリしたような絵で、絵といふか模様みたいな、ちょっと変わった絵だったので。

和田先生がどう批評するものかと思つていましたら、「人から着物を借りてきて出て来んでもいいじゃないか。借り着をしてきたような絵だ。」と比喩的な批評をされた。それきり黙つてしまつて、恩地君も一言もしゃべらない。暫くして恩地君も癪にさわつたのか、自分の絵を持つて出て行つてしまつた。皆の間にも沈黙が続いて、次が私の番だったが、先生は恩地君が出て行つてしまつたものだから、黙つて立つたまま何も言わない。恩地君はそれきり学校に来なくなり、その後、装飾的な版画を文展によく出していました。恩地君はやりの画風を採り入れたのが酷評されて淋しかったのでしよう。

和田先生には少しそういう硬い所がありました。例えば、良かったら展覧会に出そうかと思つている絵を持つて行つて見て貰うといったようなとき、先生は「これは何かに出すのか。」と訊かれ、はいと答えると、「出してから持つて来い。実力でやれ。」と。ですから和田先生の教室はあまり人気がありませんでした。絵を見てやつて、少しでも良くして展覧会を通してやろうという所が無く、徹頭徹尾やつつけるわけです。

そこへいくと藤島先生などは、出す絵だろが出さない絵だろ手が入れる。折角仕上げた絵もパツパと色付けてしまつたりし

て、あとで使いものにならなくなってしまいくらいでした。ですから、もう絵が出来上がった頃に藤島先生が廻って来るとなると、明日にも出そうと思っている奴などは裏向けておいて居なくなってしまう。で、先生が廻って来て、近所の者に「こいつはどうした。」などと訊かれ、「今ちょっと席はずしまして……。」と言うと、「そりゃいかん。お互い切磋琢磨してやれ。」などと近所の者が叱られたりしました。もちろん始めの頃はみて貰いますが、きれいに仕上げた明日出そうという絵の真ん中に棒を入れてこっちを全部赤くするとか、そういうことをされたらもう難儀しますからね。それに甘んじてやっている人はいいのですが……。こせこせした絵が嫌いで、「大きく見よ、大体に注意せよ。」といつもおっしゃった。そんな風でしたから藤島教室は結構人気がありました。

黒田先生は岡倉天心校長が牛「実際は馬」で学校へ来たというのと対照的に、真白い自転車ですって来るハイカラさんでした。正木直彦のあと、和田英作が校長になるときに、以前から日本美術院なるものを作って黒田さんらに反抗的姿勢を示していた横山大観らは日本の美術学校で西洋画科の科長を校長とするのはおかしいと反撥しました。中学生のような議論ではありましたが、それに対する和田英作の答えが面白い。「病院を見る。外科と内科があるけれど、院長に外科部長がなろうと内科部長がなろうと、どっちでもいいじゃないか。」と言うのです。

私が居た頃の美術学校は相撲部や弓術部、剣道部など、運動部が強くて、彼らが相撲部の応援に国技館へ行って歌を唄った。「相撲にゃ負けてもケガさえないけりゃ、晩に私が負けてやる」と、都々逸

みたいなものを枚敷でやるわけです。唄うだけでなく踊り出してしまうものですか、
「負けてやる」の所にケチがついて、あんな歌を唄っちゃいかんと大村西崖生徒監から相撲部の応援部が大目玉食らいました。

岩村透先生は実に面白い先生で、外のクラスの生徒が全部先生の話を聴きに來るのです。美術史の授業で、先生はある所まで読むと直ぐに脱線してしまふ。その脱線が面白い。脱線するとその講義はそこでお終いで、次の週には次の新しい所が出てきて、また脱線する。ですから私などは未だに美術史がいつの時代からどう遷って来たかなどということが系統立っていない。尤も、西洋美術史のテキストがあつたのですから、講義の無かつた部分についてはそれを読めばよかつたのですが。脱線ぶりは例えば、先生がテーブルの上で手をついて「どうかね、この頃。元氣いいか。」と始まると、もうそこで脱線です。それから「まあ、この頃の絵は皆つづいた絵なんだからね。昔ながらの描いた絵がないね。」などと言う。黒田先生の悪口などやってしまうのが面白い。よく覚えてゐるのは、「この頃の絵を描くのに理屈ばかり言っているけれど、あれじゃまるで鯉節じゃないか。」と言つたことです。要するに鯉節は最早魚ではない。精進して、だしはよく出るし、結構なものであるが、それが海の中で泳いでいたら不思議だろう、ということ、この頃の人たちの絵は最早魚ではない、おまへたちは鯉節を描いているのか、と言わんばかりの言い方です。理論ばかり詮じつめてゐると鯉節になつてしまふ。実際そのように絵がだんだん新しいものになつて行き、我々から見ればもう絵でなくなつてしまつたのですが、そうい

う状況を皮肉った面白い比喩でした。ただ、絵はこう描かなくてはいけないということについてはあまり詳しく説明されませんでした。

岩村先生の後任の矢代幸雄先生は大学生の服を着て私帽をかぶって講義に來られました。当時の美校では私帽をかぶってはいかんといいお触れが出て、それを破ると生徒監の大村先生に叱られる。矢代先生は生徒と間違えられて叱られた。我々生徒は大笑いしたのですが、矢代先生はちっとも言い訳しない。我々が言って始めて大村先生は退散したのです。

余談ですが、松方幸次郎さんは黒田清輝先生と小学校で同窓生だったそうで、私は松方さんに絵画収集の事情を聞いたことがありません。彼は川崎造船で海軍の御用で船を作って儲け、造船所の連中の勉強になるようにと大分船の絵を買ったのがきっかけで収集を始めたのだそうです。ところが松方さんという人はフランスの潜水艦の研究のためにやたらと金を使って外国へ行ったり、技師を連れて行ったりした。なぜ来たかと訊かれると絵が好きで絵を買いに来たと答える。どちらが本音かわかりませんが。モネの作品を沢山買ったときは、まず矢代先生に下見をさせ、作品にマークをつけておいて貰って、それから単身乗り込む。しかし、モネもなかなか売ってくれず、「日本には錦絵という立派ないい物があるじゃないか。あれをもっと大事にしないか。こんな絵を買う必要はない。」と言う。これには彼も弱つたらしいが、「そうじゃないんだ。日本の連中は絵が好きだ。特にフランスの絵が好きだ。日本に絵の好きな学生は三百人居るが、フランスに來られるのはその内三十人位しかない。

來られない二百何十人に見せるのだから、あなたの絵を何枚か持って行く。」と言ったそうです。これにはモネも承知し、ではどれがいいのかという段になって、矢代さんのマークのついているのを何点かあげると、モネが「皆これは高い奴じゃないか。」と言う。でも松方さんは「いや、好きだから」と。矢代さんから聞いたとは決して言わない。「そんなに好きか。」と訊かれて、「好きだ。日本人は絵が好きで、彼らに見せてやりたいから是非譲ってくれ。」と、そう言って調達して來た。偉いものです。さすが幸次郎さんだと思います。その陰で海軍からの機密費を貰って潜水艦の研究もやっていたそうです。ロダンの彫刻も半分は日本にありますが、あれもへたな彫刻を買わずにロダンを集めたのは松方さんのお手柄です。「カレーの市民」はコピーだが、あとは殆んど本物を持って來たわけですから。

○美術学校生活 曾宮一念氏

〔昭和五十八年三月四日、曾宮一念氏（大正五年西洋画科卒）をお宅に尋ねて本校在学中の頃の思い出を話して頂いた。本稿はそのときの録音をまとめた原稿に、氏御自身が大中巾に手を加えられて出來たものである。なお、氏は『夏山急雨』（昭和五十五年。創文社）にも学生時代のことを記しておられるので併せて参照されたい。〕

講演会

美校在学中に五人の講演を聴いた。まず、河口慧海はチベット旅行の話。同時に文庫で展覧会をやった。今だに印象深い。朝倉文夫

は南洋旅行談。有島生馬はセザンヌのバレットの話。「この頃セザンヌの真似をする人がいるようだが、俺はフランスでセザンヌの絵を見たけれど、もっと色が良かった。日本のセザンヌ模倣者は皆色が汚なくていかんと黒田が言った。」という話を聞いた。藤川勇造はロダンの話をした。ロダンをローデン先生と言った。以上は全部講堂でやったが、タゴール——横山大観邸と横浜の原富太郎邸に宿泊していた。——は美術学校では校庭で講演し、僕らは立って聴いた。どういう訳で講堂でしなかったのか。矢代幸雄が通訳した。矢代が美術学校に来て早々だったのだから大正五年だったに違いない。

絵具のこと

入学して五月に風景の競技というのがあって、初めて油絵具を買った。それまで油絵具なんて持ったことがなかった。文房堂へ十円持って行けば舶来の絵具と四号のスケッチ箱に筆洗いまで一切買った。それで私は工部大学跡を十日程描きに行き、大いにうれしかった。小糸源太郎が荒目にナイフで描いていたのを見て、僕もカンバスマで真似て描き、これもうれしかった。何事も十九の少年にはたのしかったのである。

講義

講義で面白かったのは岩村透で、毒舌では岩村の右に出る者はいなかった。黒田清輝とは仲が良かったので黒田が引き入れたのだから。久米桂一郎の解剖学講義は森林太郎著の『芸用解剖学』という良い教科書を使ってかなり詳しくやった。それに考古学の講義を聴いた。

美校騒動、風紀問題

美校騒動の話はあとで聞いたが、学生のかかわらぬことで教授間の争いであつたらしい。

風紀について言えば、大正五年だから吉原へ行った奴もいたし、十二階下まで行った奴もいた。私は級中では子供だったし、父に先立たれて遊ぶ金もなかった。モデル娘とそこらをぶらついたり、モデルに雇ったついでに家でご飯を炊いて貰ったりはしていたけど、別になんていうことはなかった。今思うと、お人好しの貧しい娘であつた。学校のモデル料は非常に安くて午前中ずっとやって二十五銭にしかならなかったが、月曜日には美校の控室でモデル市が立った。

種々の思い出

僕は中学生のとき毎日曜日大下藤次郎の水彩画研究所に通い、それで美術学校へ入った。その秋、授業の合間に校庭の芝生で休んでいると、文展落選画を運んできた。その中に大下の水彩があつたので私は暗い気持ちで垣間見た。夏から病氣して作品の出来が悪かつたのであろう。その日大下の死を聞いた。洋画の審査委員長の森鷗外は委員たちと相談して陳列の中に加えた。情実のようだが、鷗外には涙もろい一面があつた。

落選画を運び込んだ美術学校クラブは古い日本家屋で、ここで鈴木鼓村の京極流箏曲の演奏会があつた。私は鼓村とは話はしなかったが、その高弟の雨田外次郎（光平）と親しくなつた。彫刻の同級生で彫刻にすぐれた作があるが、箏曲では人間国宝になつた。戦後雨田と京都、東京、清水、鹿児島まで演奏会をした。鹿児島には雨

田作の東郷元帥像がある。ついにパリでも演奏会の説明をさせられた。

私のクラスには寺内、耳野、鈴木保徳など優等生がおり、金観鐘は首席で卒業した。私は入学も卒業もビリの劣等生であったが、優れた同級生と仲よく往復した。劣等生で病い勝ちであった私がひとり長生きをして思い出を書くのも不思議に思う。

最後に内話を付けたしたい。建築科を繰上げ卒業した長男俊一は軍隊に入り間もなく大陸で戦死した。その前年十九年二月疎開の荷作りをしていると安井曾太郎夫人が私をよびに来た。安井が美術学校教授に就任したので私に案内役のつまり助教になれと話をされた。安井の好意はわかるが、自ら不適任を知っていた。しかしその場は謝意を述べ疎開先から正式に辞退した。これは私にも学校にとっても良い事であったと信じている。その後伊藤廉が学部長の時、雨田光平が講堂で箏曲の演奏を望んで来たので伊藤の意向を聞きに出かけた。その日は学部長への用談だから宮殿風の表玄関から名刺を通じて面会をもとめた。学生時代は横の入り口から出入りしていたので懐しい学校の表玄関を上ったのははじめてである。この校舎は私のクラスから使い始め、伊藤訪問後久しからずして改築されたと聞く(敬称略)。

第十四節 大正三年

大正三年度東京美術学校年報

甲 款

概況

大正三年四月二日午後一時ヨリ本校第二十三回卒業證書授與式ヲ舉行シ同二時ヨリ本校開校滿二十五年紀念式ヲ行ヒ別室ニ陳列シタル本校所藏ノ参考品及卒業製作ヲ來賓ノ觀覽ニ供セリ

同年四月三日ヨリ同月五日マデ本校開校滿二十五年紀念展覽會ヲ開キ公衆ノ觀覽ニ供セリ

同年同月七日豫備科及圖畫師範科入學許可者氏名ヲ官報ニテ發表セリ

同年同月十一日 皇太后陛下崩御アラセラル 上下悲痛極リナシ 乃本日ノ授業ヲ休止シ奉悼ノ誠意ヲ表シタリ

同年五月二十四日 皇太后陛下ノ大葬儀ヲ行ハセラル、ニ付本校職員生徒一同ハ葬場殿前ニ於テ奉送ス

同年六月六日同七日ノ兩日支那國人廉泉氏ノ齋シタル書畫ヲ本校文庫ニ陳列シテ有志者ノ觀覽ニ供セリ

同年九月二十一日選科入學許可者ノ氏名ヲ官報ニテ發表シタリ 同年十月四日ハ本校設置紀念日ナルモ大喪中ニ付紀念式ヲ行ハス

同年十一月三日桑港博覽會本校出品物四十七點ヲ本省へ送付ス 大正四年一月八日午前十時ヨリ例ニ依リテ職員生徒一同講堂ニ參